

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 25 日現在

機関番号：37111

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820079

研究課題名（和文）リメディアル教育の為に「英語基礎知識テスト」の作成

研究課題名（英文）Metalinguistic test for English remedial education

研究代表者

徳永 美紀（TOKUNAGA MIKI）

福岡大学・言語教育研究センター・外国語講師

研究者番号：30461479

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語初級者における文法用語などのメタ言語の認識度を調査し、英語習熟度との関係を検証する為に「基礎知識テスト」を作成した。その結果、対象となった1180名の大学生の初級英語学習者の多くが副詞や冠詞といった基本的な文法用語が認識できないことが確認できた。さらに、「基礎知識テスト」の結果と英語習熟度テストの結果に有意な相関関係が認められたことから、日本人大学生の初級英語学習者にとって、英語を学ぶための文法用語などのメタ言語が理解できないことが英語習得の障害となっている可能性が示唆される。

研究成果の概要（英文）：In this research, a simple metalanguage test was developed to measure the metalinguistic knowledge of low proficiency English learners at Japanese universities. The result showed that many of the 1,180 participants could not identify simple parts of speech such as adverbs and articles. Significant correlations were found between the results of the metalanguage test and the participants' English proficiency test scores, indicating that the lack of metalinguistic knowledge could be preventing low proficiency English learners from improving their English.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：外国語教育

キーワード：文法用語 メタ言語 明示的知識 リメディアル教育 ラッシュ分析

1. 研究開始当初の背景

大学全入時代と呼ばれる近年、入試の多様化などの影響で、大学生の英語力が二極化しているといった調査結果が出ている。その中で、私立大学の英語関連学部以外では、高校卒業レベルどころか中学校で学ぶべき英語の基礎知識が定着していない状態で大学に入学

する学生が増加している。

こうした背景から、英語の授業をレベル分けし、英語習熟度の低い学生に対しては基礎的な文法の復習などから始める初級(リメディアル)英語教育を実施している大学も多い。しかし、これらの授業で中高の基礎文法の復習をしても、学生の文法用語などの認知度が

低く、授業や教科書の日本語での解説が理解できないという問題も生じている。

英語のリメディアル教育を必要とする学生は、レベル分けテストなど一般的な英語能力試験ではほとんど不正解という場合も少なくなく、「全体と比較して習熟度が低い」という以外の情報が得られ難い。学生がどこまで理解出来ているのかを把握し、適格なリメディアル教育を行う為にも、英語学習の基礎となる文法用語の認識度を調査する必要があると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、初級英語学習者のメタ言語理解度と英語習熟度の中に相関関係があるか、そしてリメディアル英語学習者は授業や教科書で使用されているメタ言語をどれだけ理解できているのかを検証することである。その結果、大学での初級英語学習者彼が直面する問題を明らかにし、リメディアル教育における授業改善や教材開発などに役立つことを目標としている。

3. 研究の方法

(1) 基礎知識テスト

本研究で作成した「基礎知識テスト」は、シンプルな英文の下線部の品詞や文法事項の名称を、選択肢から選ぶというものである。学生の語彙力の影響を抑える為、基礎知識テストは Vocabprofile で分析しながら、難易度の低い(使用頻度の高い)語彙のみを使用した。最も使用頻度の高い 2000 語のリスト外になってしまった単語が 7.1%残ったが、それらは *Keiko*, *movies*, *Tama*, *Tom* と *Yumiko* であり、それらがテスト項目の難易度に影響を与えるほど難しいとは考え難い。採点の利便性を考慮し、テストはマークシート方式の選択問題としたが、通常のテストのように 4 択に止まらず、例えば品詞の問題であれば基本的な品詞全てを選択肢に設定した。説明および選択肢はすべて日本語で作成し、ランダムな回答を避ける為、「わからない」という選択肢を設けた。データは Remark Office OMR を使用して集計し、Winsteps で分析した。

(2) 対象者及び英語習熟度テスト

英語を専門としない私立大学の 1、2 年生 1200 名以上を対象にテストを実施し、留学生などを除いた 1180 名のデータを分析した。英語習熟度テストは、それぞれの大学がカリキュラムの一部として実施しているテストを使用した。対象者のうち、639 名の TOEIC Bridge テスト結果、および 87 名の VELC テスト結果が入手可能であった為、それらを習熟度テストスコアとし、「基礎知識テスト」の

結果との相関関係を調べた。

639 名の TOEIC Bridge テストのスコアの平均は 117.0 点であった。TOEIC Bridge テストの 110 点から 120 点が TOEIC テストの 280 点から 310 点とされているため、これらの学生の英語習熟度は TOEIC テストで 300 点前後といえるであろう。VELC テストスコアが入手できた 86 名の平均スコアは 444.1 点であった。VELC テストのガイドラインによると、400 点から 500 点が TOEIC テストの 330 点から 450 点と示されている為、これらの学生の英語習熟度は TOEIC テストで 400 点前後といえるであろう。VELC テストを受験したグループの方が英語習熟度が高いが、両グループとも英語習熟度としては初級から初中級であり、それぞれのグループで平均以下のスコアであった対象者はリメディアル教育が必要なレベルであると考えられる。

4. 研究成果

(1) 英語習熟度との相関関係

ラッシュ分析では素点を間隔尺度上の数値にするために受験者の能力推定値 (person measures) と項目の困難度推定値 (item measures) が算出され、それらの値はロジット (logits) というオッズの対数の単位で表される。メタ言語知識度のスコアは、「基礎知識テスト」結果のラッシュ分析により得られた受験者能力推定値を使用した。ピアソンの相関係数を使用した「基礎知識テスト」による英語のメタ言語認識度と英語習熟度の相関は以下の通りであった: TOEIC Bridge リスニング ($r = .52$)、リーディング ($r = .66$)、合計 ($r = .64$)、VELC Test リスニング ($r = .65$)、リーディング ($r = .80$)、合計 ($r = .79$) (表 1)。

表 1 基礎知識テストの結果と英語習熟度テストスコアの相関関係

TOEIC Bridge® test (n = 639)	VELC test (n = 86)
Listening .52	Listening .65
Reading .66	Reading .80
Total .64	Total .79

Note: $p < .01$ (2-tailed).

両習熟度テストのリスニング、リーディング、合計の全てのパートとメタ言語認識度について有意な相関関係が認められた。習熟度テストのリーディングパートとの相関が一番高いという結果は国内外での先行研究と同じであり、メタ言語認識度が語彙や文法などの正確さと関連が高いことを示しているといえる。

(2)初級学習者のメタ言語認知

「基礎知識テスト」の結果から、対象者の多くが品詞など基本的なメタ言語を認識できないことが明らかになった。「基礎知識テスト」は品詞、5文型の要素、文全体の時制及び態、その他の4つのパートから成り、それぞれのパートの結果を項目の困難度順に示す(表2-5)。

①品詞

「基礎知識テスト」に含まれた品詞で一番困難度の高かった項目は副詞であった。slowlyはlyのついた典型的な副詞であるにも関わらず、副詞であると認識できた対象者は1180人の半分以上にとどまった。さらに、theが冠詞であると認識できた対象者も全体の68%であった。日本人英語学習者にとって冠詞の使い方の習得が困難であることは周知の事実であり、教科書などでも詳しく解説されている。しかし、a、an、theの3つが冠詞であると認識できない学習者に「冠詞の使い方」をいくら説明しても効果は期待できない。

表2 品詞の結果：困難度順

項目	困難度 (ロジ ッツ)	正答 (1180人 中)
The teacher speaks <u>slowly</u> .	0.82	副詞 (539)
Yumiko can speak English <u>well</u> .	0.24	副詞 (663)
<u>The</u> box is small.	-0.45	冠詞 (804)
The teacher is <u>kind</u> .	-0.56	形容詞 (828)
I <u>will</u> call you tomorrow.	-0.69	助動詞 (849)
Yumiko <u>can</u> speak English well.	-0.94	助動詞 (893)
There is a <u>small</u> box on the desk.	-1.00	形容詞 (903)
There is a small box <u>on</u> the desk.	-1.43	前置詞 (967)
Tom is a <u>teacher</u> .	-1.88	名詞 (1023)
The <u>box</u> is small.	-2.90	名詞 (1105)
<u>Tom</u> is a teacher.	-4.11	名詞 (1152)

品詞の中で一番困難度が低かった項目は名詞であったが、その中でもバラつきがあった。Tomという人名が名詞であると認識出来た対象者が1180名中1152名にものぼる一方、人間ではないboxになると正答者が50名ほど減り、人間であっても主語ではなくなるとさらに正答者が減少した。「名詞=名前」、「名

詞=主語」という誤認が存在する可能性が高いことが判明した。

②5文型の要素

今回の研究では、主語、述語動詞、目的語、補語のうち、パイロットテストで正答率の低かった目的語と補語のみをテスト項目とした。文型の要素はS、V、O、Cとアルファベットで表示されることが多い為、選択肢には「主語(S)」のように名称とアルファベットの両方を記載した。困難度推定値から、品詞に比べると全体に困難度が高いことがわかる。誤答は補語と目的語の混同が大半であったが、主語や述語動詞を選択した対象者も多かった。文末にあるa doctorを主語と判断した対象者が70名いたことから、品詞の部分でも言及したとおり、「名詞=主語」との誤認がうかがえる。

表3 5文型の要素の結果：困難度順

項目	困難度 (ロジ ッツ)	正答 (1180人 中)
Keiko is a <u>doctor</u> .	1.02	補語 (496)
Keiko calls her cat <u>Tama</u> .	0.57	補語 (593)
Keiko gave her mother <u>a present</u> .	0.29	目的語 (656)
Keiko gave <u>her mother</u> a present.	0.21	目的語 (671)
Keiko looks <u>happy</u> today.	0.17	補語 (677)
Keiko calls <u>her cat</u> Tama.	0.04	目的語 (706)
Keiko loves <u>music</u> .	-0.89	目的語 (885)

③文全体の時制および態

表4を見ると、文全体の形は比較的困難度が低かったことがわかる。困難度が一番高かった“I had my room cleaned.”の正答数は127名であり、過去完了を選択した対象者が163名と正答数よりも多かった。確かに“I had cleaned my room.”と語順が異なるだけであるが、意味が全く違うものになってしまう。分詞構文の項目で意外にも多かった誤答が命令文であった。命令文に関する「主語が無く、動詞から始まる」という曖昧な知識、そして動詞と分詞の違いが理解できていないことから起きた誤答であると考えられる。受動態、現在完了、仮定法は、学生が実際に使える構文なのかは別として、「be+過去分詞」、「if」や「have+過去分詞」の明瞭さによって認識度は高い。一方で、「過去分詞=完了形又は受動態」と勘違いしている学生も多いようで、「使役」や「分詞構文」の項目で「完

了形」や「受動態」を選んだ誤答が目立った。

表4 文全体の時制及び態：困難度順

項目	困難度 (ロジ ッツ)	正答(1180 人中)
I had my room cleaned.	3.39	使役(127)
Written in simple English, this book is easy to read.	0.50	分詞構文(607)
Walking home from work, Tom stopped to buy some food.	0.23	分詞構文(665)
She made her brother clean her room.	0.08	使役(699)
The book was written by a famous writer.	-1.03	受動態(907)
I have finished my lunch.	-1.10	現在完了(921)
If I were you, I would study harder.	-1.89	仮定法(1024)
I will call you in the morning.	-3.07	未来(1113)

このパートで一番困難度が低かったのは「I will call you in the morning.」が未来を表すという項目であり、困難度推定値は-3.07 ロジッツであった。しかし、最初の品詞のパートで、will が「助動詞」として認識できた学生は849名にとどまり、困難度推定値も-0.69 と高めであった。つまり、will が未来を表すということは理解していても、will が助動詞であるとは認識できていない対象者が多数存在するということである。これは文法よりもコミュニケーションを重視した教育の結果といえるかもしれない。

④その他の項目

その他の項目(表5)で一番困難度が高かったのは「先行詞」であり、誤答の多く(511名)は「主格の代名詞」であった。「関係代名詞がかかる名詞」などと説明されることも多く、「先行詞」という名称を知らずに関係節を理解することは可能である。実際、「先行詞」の困難度推定値が1.57 ロジッツであるのに対し、「関係代名詞」は-0.95 ロジッツと困難度が低い。しかし、woman という単語を「代名詞」と回答してしまうのは、代名詞に関する認識が曖昧なのではという疑問が残る。このパートの他の項目は、動詞の過去形と過去分詞、現在分詞と動名詞、疑問詞と関係代名詞など、同じ単語が違う役割をする場合の誤解が多かった。名称が混同しているだけなら問題ではないであろうが、これらの誤解から文全体の形式を間違えて理解してしまう可

能性も示唆される。

表5 その他の項目：困難度順

項目	困難度 (ロジ ッツ)	正答 (1180 人中)
The <u>woman</u> who is wearing a red dress is my sister.	1.57	先行詞(383)
I like <u>watching</u> movies.	0.19	動名詞(670)
He has finished <u>his</u> work.	0.04	所有格の代名詞(706)
The baby is <u>sleeping</u> .	-0.12	現在分詞(740)
He has <u>finished</u> his work.	-0.27	過去分詞(767)
The baby <u>slept</u> all night.	-0.30	動詞の過去形(774)
The woman <u>who</u> is wearing a red dress is my sister.	-0.95	関係代名詞(893)
<u>Who</u> is that woman?	-1.07	疑問詞(907)
The book was <u>written</u> by a famous writer.	-1.58	過去分詞(979)
<u>He</u> has finished his work.	-1.93	主格の代名詞(1025)

(3) 文法性判断項目

24年度に実施した「基礎知識テスト」には、本研究を今後発展させていくためのパイロットテストとして、文法性判断項目を試験的に追加した。この項目が受験した対象者は1180名中524名であった。文法性判断テスト(Grammaticality Judgment Test)はメタ言語能力を測る方法として先行研究の多くで使用されている。本研究は初級学習者を対象としている為、英文が文法的に正しいか判断し、間違っている場合はその理由を選択肢から選ぶというシンプルな形式にした。結果(表6)をみると、このパートは他のパートよりも全体に困難度推定値が高かったことがわかる。中でも困難度が高かったのが分詞構文と使役の文であり、これは上記③の結果と一致している。しかし、③で困難度の低かった(-1.89 ロジッツ)仮定法は、ここでは2.43 ロジッツと高い困難度となっており、if の存在によって文が仮定法であると認識できても、仮定法の形が正しく理解できていないとは限らないことを示している。直説法の if の項目の方が比較的困難度は低かった(1.49 ロジッツ)が、これが文法的に正しいと判断できた対象者も半数以下にとどまる。

表6 文法性判断項目の結果

項目	困難度 (ロジック)	正答 (524名 中)
<u>Look out the window of a bus, Keiko saw a car accident.</u>	3.22	looking (86)
<u>If you have a lot of money, what would you buy?</u>	2.43	had (140)
<u>I will have my staff call you by tomorrow night.</u>	2.31	正しい (148)
<u>These wine classes can break easy.</u>	2.30	fixed (150)
<u>Tom is going to have his car fix.</u>	2.25	easily (155)
<u>Keiko has a sister who live in New York.</u>	1.63	lives (210)
<u>This is where I met my husband.</u>	1.61	正しい (211)
<u>If I see Tom tomorrow, I will ask him about it.</u>	1.49	正しい (224)
<u>This used car goes very fast.</u>	1.28	正しい (242)
<u>I have a friend who brother is a famous singer.</u>	0.28	whose (341)

三・単・現のsの項目は「正しい文である」を選んだ対象者が172名と多かった。今回よりも全体的に英語習熟度の低い学生を対象に行ったパイロットテストの段階で、三・単・現のsの認識度そのものは80%以上であったことから、この項目の高い困難度は三・単・現のsが見落としがちであることが原因であると考えられる。

他の部分と比較してこのパートの困難度がこれだけ高いということは、メタ言語を認識できても、必ずしもその品詞や構文などの使い方を理解しているわけではないということを示している。だからと言ってメタ言語を知る必要が無いということではない。先に述べた「先行詞」のように、他の言葉を使って説明することが容易なメタ言語も存在するが、分詞構文や使役の文を理解するには、現在分詞と過去分詞の違いを理解する必要があり、その為にはそれらのメタ言語を使用した方が効率の良い説明が可能となるからである。

(4) 結論

本研究の結果から、英語の授業や教科書の日本語での説明を理解出来ない大学生が多数存在すると推定できる。近年、会話力が注目され、文法や文法用語などが軽視される傾向

にある。しかし、日本のように生活でほとんど英語を使用しない環境では、明示的知識を養い、暗示的知識をサポートしなければ、会話の上達も難しい。高校でも英語での授業が開始される中、理解できない部分を自分で調べる必要性も増すであろう。日本人英語学習者にとってのメタ言語や明示的知識の重要性に関しては、更なる研究が必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 徳永美紀、学生の英語基礎知識理解度－理解できる授業の実施を目指して－、福岡大学言語教育研究センター紀要、査読無、11号、2012、pp. 85-98

〔学会発表〕(計5件)

- ① 徳永美紀、Metalinguistic knowledge of low-proficiency EFL students at Japanese universities、RELC International Seminar 2013、2013年3月19日、シンガポール
- ② 徳永美紀、大学生の文法用語認識度を調べるための基礎知識テスト、日本言語テスト学会第16回全国研究大会、2012年10月27日、専修大学生田キャンパス
- ③ 徳永美紀、冠詞って何? : 初級英語学習者の文法用語理解度、日本リメディアル教育学会第8回全国大会、2012年8月29日、立命館大学衣笠キャンパス
- ④ 徳永美紀、Metalinguistic knowledge of low-proficiency EFL learners at a Japanese university、PROMS 2012、2012年8月7日、嘉興、中国
- ⑤ 徳永美紀、Low proficiency university EFL learners' understanding of grammar terms、11th Annual JALT Pan-Sig Conference、2012年6月16日、広島大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://tokunagamiki.weebly.com/research.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

徳永 美紀 (TOKUNAGA MIKI)
福岡大学・言語教育研究センター・外国語
講師
研究者番号：30461479

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし